

ドクター・バーナード・ホームの慈善事業による子どものケアに関する研究 —創設の背景と設立前史—

三 上 邦 彦

Notes on Child-care Charity of Dr Barnardo's Homes : The Background and Prehistory of Foundation

MIKAMI Kunihiko

トーマス・ジョン・バーナードは、1867年、イースト・エンドでの Ragged School（ぼろ学校：貧民学校）の監督者として活動をはじめ、1870年には、ステイプニーに貧困浮浪男子のための施設を創設し、さらに1876年には小舎制のガールズ・ヴィレッジ・ホームを設立した。のちにイギリス及びカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ等のイギリス連邦諸国に100箇所以上の施設を持つ Dr Barnardo's Homes として世界的な認知がされてきた。T.J. バーナードが1905年に亡くなった頃までには、彼が設立したチャリティーは、96カ所ありおよそ8,000人の子どもたち・若者たちを入所施設で支援し、4,000人の子ども達への里親委託、18,000人のカナダやオーストラリアへの児童移民を支援してきた。また彼の事業活動の開始から亡くなるまでの間に10万人以上の子ども・青少年たちを救済、訓練、生活の場所を提供している。ここではドクター・バーナード・ホームの創設の背景と設立前史について先行文献をもとにして研究ノートとしてまとめた。

キーワード：ドクター・バーナード・ホーム、トーマス・ジョン・バーナード、慈善事業による子どものケア、イギリス

Thomas Barnardo began his work in London in 1867 when he set up a ragged school in the East End, where poor children could get a basic education. In 1870, Barnardo opened his first home for boys in Stepney Causeway. In 1876 he started the Girls' Village Home in Barkingside (Essex). As present, there are over 100 homes in Britain and others in Canada, Australia, New Zealand and South Africa. When Dr Thomas Barnardo died(1905), there were nearly 8,000 children in the 96 residential homes he had set up. More than 4,000 children were boarded out, and 18,000 had been sent to Canada and Australia. From the foundation of the first Barnardo's home in 1870 to the date of Barnardo's death, nearly 100,000 children had been rescued, trained and placed out in life. In this paper, the background of Dr Barnardo's homes and prehistory of its foundation are summarized as a preliminary study based on earlier literature.

Keywords: Dr Barnardo's Homes, Thomas John Barnardo, Child-care Charity, England

I はじめに

ドクター・バーナード・ホームは、イギリスを代表する民間児童福祉団体であり、創設者のトーマス・ジョン・バーナード(Thomas John Barnardo 1845-1905)は児童養護施設の近代化の先駆者として知られている。

また、今日では、ドクター・バーナード・ホームから Barnardo's として子ども虐待、非行問題、障がい児問題、地域における家庭支援等々の地域ケアを中心とした総合的な福祉活動を展開している。

1866年にバーナードが故郷のダブリンを離れロンドンで生活をはじめた当時の社会の様子は、物乞いを

する子どもや、見捨てられた子どもたち、不道德な養育者のもとにいる子どもたち、浮浪児であふれていた。1867年に彼は、アーネスト・ストリートでの Ragged School（ぼろ学校：貧民学校）の監督者として活動をはじめ、1870年には、ステイプニーに貧困浮浪児童のための施設を創設し、さらに1876年には小舎制のヴィレッジ・ホームを設立した。のちにイギリス及びカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどのイギリス連邦諸国に100箇所以上の施設を持つ Dr Barnardo's Homes として世界的な認知をされてきた。また、施設を拡大するだけでなく、バーナードホームの各施設から里子や養子として委託する方法も重視し、その実践を行ってきた。さらに知的障がい児や身体障がい児などの障がいを抱える児童の養護にも取り組み、広範な活動を展開してきた。

バーナードホームは1970年代まで、数百もの児童養護施設を設立し、施設処遇、里親養育をおこない世界各国に影響を与えてきた。さらに、T.J. バーナード没後100年に当たる2005年には、記念事業として、Barnardo's は「人生の良きスタート」Better start in life というアピールを行ない、英国の14の地域で、性的虐待の被害にあっている青少年（10歳から18歳）に対して实际的な助言援助や情緒的支援を提供するためのプロジェクトを実施している。

さて、本報告では以上のような経過を持つバーナード・ホームの全体的な概要をT.J. バーナードが活躍していた時代に限定し、事業の内容を理解するための前提として、ドクター・バーナード・ホームがイギリスにおいていかなる背景のもとに設立してきたのかについて、また創設の背景についてこれまでのドクター・バーナード・ホームに関する先行文献および先行研究を元にして概観したいと考える。

Ⅱ ドクター・バーナード・ホーム設立までのイギリスにおける児童保護

貧困などによって家庭に恵まれない孤児などを保護する、かつての孤児院、現在の児童養護施設は、西洋、東洋にかぎらず古い歴史を有している。イギリスでは、1601年の救貧法の段階から貧困等の恵まれない子どもたちは、救貧法の対象となり施設に収容する処置が取られた（1552年に創設された Christ's Hospital は9歳から17歳の児童について保護している）。しかしながら、大きな施設であり、高齢者や障がい者、精

神障がい者などの大人と一緒に生活することを強いられ、子どもたちも酷使や虐待を受けることがしばしば見られた。これは、すべての入所者は労働者家庭の最低の生活よりも劣等な処遇を経験すべきであるという救貧法の原則があったためである。1802年の工場法の成立以後、児童労働に関しては酷使や虐待を禁止し、年齢制限や規制や児童の保護が行なわれるようになった。

その後、1834年新救貧法が制定されたことによって、新しく設置された行政部門の中央救貧法委員会は、救貧院において成人の収容者から児童を分離すること、また貧民学校の内容を改善することが検討された。すなわち、新救貧法に基づいて保護を受けている児童を一般の救貧院から分離して、道徳的・職業訓練をすることによって貧困問題を図ろうとしたわけである。しかし、救貧院内のスタッフ自身の問題も多く児童の監督も不十分であったと指摘されている（桑原1989：91-92）。

このような中、1840年代に入り、非行児童少年のための貧民学校（Ragged School）設立運動が起こった。この運動の中心になったのは、1835年に設立された「ロンドン伝道会（The London City Mission）」に所属するメンバーであり、1845年には40箇所の貧民学校が設立されてイギリス国内に急速に広がっていった。これらの学校の対象者は、①送監された犯罪者の子ども、②地方監獄の受刑者の子ども、③釈放された窃盗犯の子ども、④最下級の乞食および浮浪者の子ども、⑤飲酒癖のある両親をもつ子ども、⑥虐待遺棄された継子、⑦貧困のゆえに子どもの衣服を整え学校の月謝を支払うことが不可能な一般家庭の子ども、⑧孤児、遺棄された児童ならびに家出した児童で、乞食ならびに窃盗で生活している者、⑨勤労少年で全く学校教育を受けていない者、⑩両親に売春を強制されている少女、⑪貧乏なローマンカトリック教徒の子どもであった（桑原1989：94）。

このような貧民学校制度は急速にイギリス全土に広がっていき1851年にはイギリス国内の35都市に設立されている。このRagged Schoolの設立によりロンドンの少年犯罪者は75%減少したという報告も見られる（Marcel Berlins & Geoffrey Wansell 1974：37-43）。保護の観点から家庭に恵まれない児童を施設が養育するようになる最初は、慈善事業家による民間施設の試みであった。

イギリスの最初期の施設養育として、1739年、トーマス・コーラムは捨て子養育所（London Foundling Hospital）を設立された。彼は船長であったが、1719年以降は引退しロザーハイトに住んでいたが、母親が養育できないために遺棄された赤ん坊をみたことをきっかけに17年間施設の設立のキャンペーンと請願を行い、ジョージ二世から施設開設の王室の認可を得た。その施設はブルームベリに作られ、現在も財団の事業が継続して行なわれている。

また、ジョージ・ミュラーによるブリストル孤児院は、1836年に開設されている。ロード・シャフツベリー・ホーム（Shaftesbury Homes）は1843年に創設されており、現在もその事業が続けられている。さらに今日では児童自立支援施設として知られているセント・ヴィンセント（St Vincent's）にしても当初はカトリック系の孤児院としてリバプールにおいて1862年以来、施設保護が継続され行われている。

Ⅲ ドクター・バーナード・ホームの創設

福音的博愛主義者の新しいグループが生まれた19世紀後半の時期にトーマス・ジョン・バーナード（1845－1905）が登場する。彼は医学の訓練を受け、中国への医療伝導を目指していたが、イースト・エンド・ロンドンでの伝導に専念するようになり、1867年にはホープ・ブレイス貧民学校 Hope Place Ragged School の監督者に任命された。

当時、貧民学校は、あくまでも「学校」であり、児童の宿泊を受け付けてはいなかった。学校の仕事を終え、帰り仕事をしていたバーナードは、まだ学校に残っている少年の存在に気が付いた。少年の名はジム・ジャービス（Jim Jarvis）であった。ジムはバーナードの貧民学校に住まわせてほしいと懇願したものの、バーナードは、ここは学校であり、家ではないのだから宿泊させることはできないとジムの願いを断った。バーナードはジムと話をする中で、ジム自身は自分の出生について知らず、父親がだれであるかもわからないと言い、母とは5歳の時に死別し、以来天涯孤独の身となってしまったと語った。放浪児たちに加わり、バーナードの想像を絶する経験をし、今日に至っているとのことであった。ジムによれば、そうした児童は数多く存在しているとのことであった。

1866年11月のある夜、ジム・ジャービスと食物と一夜の宿を交換条件にして、家のない子ども達が寝て

いる秘密の隠れ家を見せてもらうことをバーナードが申し出た。

「真夜中すぎに、私たちは歩いてハウズディへ出発した。少年はついに狭い中庭へと入っていった。突然彼は立ち止まり、昼間はぼろ市場として使われている長い空っぽの物置を指さした。人の気配はまったくなかった。‘ジム、子どもたちはどこだ？’私は騒いだ。‘屋根の上だよ。’彼は答えた。私たちは一緒に塀の上のかさ石によじ登った。」

私は信じられない気持ちで見下ろした。そこには10人かそこらのぼろを纏った少年たちが犬のようにかたまって横たわり、裸足で、寒さで土気色になりながらぐっすり眠っていたのだ。ジムは腕を引っ張り、「こっちへ来て。あそこにもっとたくさんいるよ」と。（ヤングハズバンド&プリル 1991=1998：117-142）

このような、孤児たちの現実を目にしたバーナードは、寝起きする場所もなく、貧困にあえぐ孤児たちに対して何か行動を起こさねばという思いにかられ、ここにバーナードの貧孤児救済活動が始まる。

1867年、イズリントンの農業会館で行われた宣教師会議に出席したバーナードは、代理としてホープ・ブレイス貧民学校 Hope Place Ragged school について話す機会を与えられ、イースト・エンドにおける貧困児童の現状と寄付を訴えた。バーナードの演説は集会に参加した多くの人々に感銘を与え、新聞記事としても報道され、当時慈善事業家として知られた、シャフツベリー伯（7代目）、アンソニー・アシュレイ・クーパー（Anthony Ashley-Cooper 1801-1885）の知ることとなった。尚、シャフツベリー伯は、人権擁護の立場から、労働者の環境改善に努め、1833年の工場法や1847年の10時間労働法の成立に貢献し、貧民学校の成立やキリスト教伝道活動に尽力した人物である。

バーナードの体験談が事実であることを確かめるために、アシュレイ・クーパーはバーナードを訪問し、彼と共にイースト・エンドの貧困児童の現状を視察した。バーナードの案内でイースト・エンドを視察したクーパーは、その状況を理解し、バーナードへの援助の約束をした。クーパーの励ましを受けたバーナードは、イースト・エンドにおける貧困児童のための慈善事業に専念するために、キリスト教誌「リバイバル」に投稿し、イースト・エンドの貧困児童の窮状をさらに訴えたのである。

1868年にバーナードは、ホープ・ブレイスの貧民

学校に隣接する建物を買い取って、イースト・エンド児童青少年救済伝道団 East End Juvenile Mission を設立した (EEJM)。EEJM はバーナードホームの事業の母体となるものであり、以後、彼の事業の総称として機能することとなる (津崎 1980: 30)。

1870 年 12 月 8 日にステップニー・コースウェイに 25 人の少年を入所させる予定で最初のホームを開設した。開設当初、ビリングスゲートを訪れたある夜、5 人分の空きベットしか残っていなかったためバーナードは選抜を行った。自分も入れてほしいと頼む少年の一人に、赤毛のため、にんじんという名で呼ばれている 11 歳の浮浪児ジョン・ソマーズがいた。彼は父を知らず、7 歳の時には母は彼を追い出したのだった。バーナードはやむをえず断ったが次の空きができた時には第一の優先順位にすると約束した。数日のちに、市場の運搬人が大きな砂糖の樽を引っ張り出すと、中ににんじんが入っていた。疲労と野ざらしになっていたこと、それに加えて飢えが検死官が判定した死因であった。

バーナードは、拒絶され腹を空かせた小さな子が、そのように死んでいったという思いは彼の心に深く刻み込まれ、二度とこのようなことが起こらないようにと誓った。数日後、看板がホームの外に掲げられた。「困窮した少年は誰でも受け入れます」(No Destitute Boy Ever Refused Admission!) と書かれていた。また 1876 年にガールズ・ビレッジが開設されると「困窮した少年・少女は誰でも受け入れます」(No Destitute Boy or Girl Ever Refused Admission!) と看板は掛け替えられた。まさに、これはバーナード・ホームの基本理念そのものであった。(ヤングハズバンド & ブリル 1991=1998: 117-142)

尚、その頃、すでにベンジャミン・ウォーらが全国児童虐待防止協会 (NSPCC) 設立のための法制化に向けて尽力していた。名誉参事会員エドワード・ルドルフとトーマス・ボウマン・スティーブンソン牧師は、教会が貧窮した浮浪児にシェルターを準備する必要性を訴え、彼らの働きにより浮浪児・迷子教会と全国児童ホーム (National Children's Home) が設立していることも明記したい。

IV ドクター・バーナード・ホームという施設ができた時代

ドクター・バーナード・ホームが創立した 19 世紀

のイギリスにおける市民のボランティアリズムは、一貫して国家と個人・家族の間に介入し、コミュニティにおけるボランティア活動となり、その役割は広く市民に浸透、意識されてきたとされている。イギリスのコミュニティを基盤にした民間活動は、産業革命を経て、救済だけではなく広範な現在の社会福祉に通じる慈善活動を行なうことになる。1830～1840 年代急激な社会構造の変化により社会不安が広がり、ラダイト (機械打ち壊し運動)、チャーチスト運動などが起こり、多くのイギリス国民が失業、貧困、飢餓に陥った。そのような中であって、1844 年ロッジデールにおいて世界最初の協同組合を結成し店舗を経営した。同年の 1844 年、ジョージ・ウィリアムズらが YMCA (Young Men Christian Association) を創設し、青少年等の救済、社会教育を行なった。さらに、こうした慈善団体を支援するために 1869 年、慈善組織協会 (COS, Charity Organization Society) が出来て、団体相互の連絡調整を果たすとともに友愛訪問を行なった。これによって救済者に対して条件に応じて対応しようとする取り組みがなされるようになってきた。特に 19 世紀後半の慈善組織協会の活動はケースワークやコミュニティワークなど、援助技術の科学化への道を拓いた先駆的实践であると考えられている。しかし、この慈善組織教会の活動は貧困に対する認識を欠如している点により、セツルメントの創始者たちから批判を受けている。

セツルメント運動は、文明評論家のジョン・ラスキンが提唱し、社会改良家のオクタビア・ヒル、サミュエル・バーネット、アーノルド・トインビーら貧困救済委員会、ホワイト・チャペル地区委員であった聖ユダ教会司祭が妻とともに、地域の貧困者救済に力をいれながら、貧困、不衛生、無教育などによって阻害された労働者生活を改良する新たな道を求めようとした運動である。セツルメント活動の創始者とされるエドワード・デニス (Edward Denison 1840-1870) は、1867 年にイースト・エンド、ステブニー地区において労働者と共に生活しつつ、貧民学校の設置による子弟の教育や地域の生活改善にあたるなどの積極的な奉仕活動を行なった。デニスの活動は、貧困救済から始め、彼らに自活の道を与え、ついに労働者教育、労使協調、労働者団体組織という方向に進んだが、1870 年、わずか 30 歳で亡くなった。デニスの意志は、ウィリアム・フレメントル (William H. Fremantle 1831-1916) に受け継がれ、後にサミュエル・バーネッ

ト (Samuel Augustus Barnett 1844 -1913) によってその事業が大成されることとなる。バーネットは 1868 年に正牧師の資格を得て、イースト・エンドのスラムで、セント・ユダ教会の牧師として、精力的に教会の改革を進め、教会の活性化を図るため日曜礼拝の復活、コンサートや絵画会の開催、これまで関わってきた C O S の活動や大学拡充運動の拠点づくりに積極的に住民と関わるようになり、その生涯をセツルメント運動に捧げた (山口 2004 : 133-149)。バーネットの活動は多くの人々に影響を与え、オックスフォード大学で経済学を教えたアーノルド・トインビー (Arnold Toynbee 1852 -1883) は、バーネット夫妻が学生たちにスラムの窮状を訴える姿に影響を受け、自ら進んでスラムに入り、実践家として活動した。ついに 1884 年、世界初のセツルメントハウスであるトインビー・ホールがバーネットを初代館長としてロンドンコマーシャル通り 28 番地に創設された。セツルメント運動の特色は、スラムに社会改良家が自ら入り込んで問題の原因究明、生活者心理を理解することから出発し、生活改善のみならず社会的な取り組みとして住環境改善を行い、社会的安定を目指すところにあった。そのため、セツルメントは地域の改良をめざして活躍するセッターと住民とが人格的交流をもち、その関係のもとに地域の人々の問題に応える信頼と協働に基づく連帯の拠点であった。いわばその活動は対人支援から社会支援に拡大してきたと言えるであろう。

1860 年代から 70 年代にかけて、貧困階層への対応は「抑圧」が重視されていた。例えば、ロンドンの一時保護所では、毎晩、平均 700 名の浮浪者が宿泊しており、収容者の入退所の取り扱いについて、法律によって厳しく規制されていた。(C.J.Ribton-Turner 1887 : 308-310)。

このような、「抑圧」方式は、対処療法的であった。一時保護所を退所した彼らは、次の宿泊先として慈善的施設いわゆる一泊所 (Night Refuge) を利用したのである。また、教会付設の「ぼろ学校」(Sunday Ragged School) もまた、礼拝後の昼食と夕食を取るために利用されていた。下層貧民のためのいくつかの伝道所や教会も同様であった。

しかし、1860 年～70 年代における、救貧当局警察、慈善改革者たち、とくに COS の見解は、慈善的な施設活動を「無差別の慈善」として乞食 (Mendicity) の原因とみなしていた。

浮浪児における公的施策は、1857 年「浮浪児、困窮児、非行児の保護および教育のための、よりよき施策のための法律 (an Act to make better Provision for the Care and Education of Vagrant, Destitute, and Disorderly Children)」の成立に始まる。浮浪者対策としての感化院および職業訓練学園法案は、1854 年にダンロップが提出し、さらに 1857 年ノース卿 (Sir Stafford Northcote) が提出し、法案の主旨を引き継いだアダリー (Adderley) が最終的に提出し、1857 年成立した。この 1857 年法 (20 & 21 Vict. C. 48) では、警察判事は浮浪者法の罪で拘留された 7 歳以上 14 歳未満の児童を、認可職業訓練学園 (Certified Industrial School) に送致することができるとされている。また、児童が退園する場合には、両親または保護者は、児童に対して正しい取り扱いをすることを、12 ヶ月間保証する文書を、判事に提出しなければならない。両親、保護者が、これに従わないときには、必要と思われる学園に児童を引きとめ、再教育を続ける。また、両親などが誓約書を提出したにもかかわらず、児童が浮浪していることが明らかになった場合は 40 シリングの罰金を科せられると規定している (C.J.Ribton-Turner 1887 : 284-286)。

その後、1860 年には、すべての職業訓練学園は刑罰的規定を持っているために、内務省の管轄下に置かれることになった。さらに 1861 年職業訓練学園法 (24&25 Vict. c.113) では、警察判事は連行された浮浪児を調査するためにワークハウスに収容した後に、15 歳まで職業訓練学園に入所させる権限を与えられた (C.J.Ribton-Turner 1887 : 286-287)。1866 年法 (29&30 Vict. c.118) では、浮浪児のカテゴリーがさらに明確に以下のように規定された。14 歳以下であって、(1) 乞食をし、施与を求めるもの、(2) 放浪、住所不定のもの、(3) 孤児又は両親が入監中のもの、(4) しばしば盗賊団に加わったもの、(5) 12 歳以下で、入監の罪を犯したもので、両親の申立てによるもの、ワークハウスまたは救貧法の適用を受けているものは、職業訓練学園に入所させることになっていた。

また、10 歳以上の児童であって、ワークハウスに入所しており、救貧法学園の規則に従わないときには、14 日以上 3 ヶ月以内の重労働を課し、その後、職業訓練学園に送致することになっていた。また、職業訓練学園から逃亡したものについては、6 ヶ月以内の重労働を課すとともに、意図的に逃亡を助けた

り、職業学園に帰園することをさまたげるものは、20ポンドの罰金、2ヶ月以内の重労働か禁固を課すことになっていた。この規定は、1867年法、1868年法でも繰り返し規定され、強制的性格を強めていった(C.J.Ribton-Turner 1887: 287-288)。

このような公的な施策は、1860年代から70年代にかけて増加した浮浪児、非行犯罪少年の状況を反映したものであった。一方、T.J.バーナードの「ドクター・バーナード・ホーム」の活動は1870年から80年代にかけての浮浪者対策の中で特異な位置を占めていた(高野 1985: 119)。ロンドンのような大都市の貧窮と犯罪的な社会環境に放置されていた「浮浪児童」(孤児、貧窮児、被虐待児)の大部分は、成人の浮浪者と接触し、全体として「浮浪者群」(tramps)の一部となっていた。まさにT.J.バーナードは、この階層への直接的救済活動を行っていたわけである。

したがって、当時の時代背景を受けながら、ドクター・バーナード・ホームが創設されたこととして認識されるものでもあり、直接的な浮浪児・非行児・虐待児の保護活動を発展させた大きな契機となった状況でもあったと言えよう。

引用文献

- Marcel Berlins & Geoffrey Wansell, 1974, *Caught in the Act: Children, Society and Law*, Penguin Books Ltd
- 桑原洋子, 1989, 『英国児童福祉制度研究－足枷から慈悲そして福祉へ』法律文化社
- 高野史郎, 1985, 『イギリス近代社会事業の形成－ロンドン慈善組織協会の活動を中心として－』勁草書房
- 津崎哲雄, 1980, 「ドクター・T.J. バナード略伝」『ソーシャルワーク研究』6(1), 28-39
- C.J.Ribton-Turner, 1887, *A History of Vagrants and Vagrancy and Begging*, London: Chapman & Hall
- 山口信治, 2004, 「英国における大学セツルメント運動の立役者チャノン・バーネット(その2)」社会学部論集第39号, 佛教大学社会学部
- ヤングハズバンド, A & ブリル K, 永岡正己訳, 1991=1998, 「イギリスにおける児童ケアの発展－1739-1970年」梅花女子大学文学部紀要, 人間福祉編 32, 梅花女子大学, 117-142